



Title	都市エコロジー観測所にゅうすれたあ 01
Author(s)	
Citation	都市エコロジー観測所にゅうすれたあ. 2024, 1, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/98531">https://doi.org/10.18910/98531</a>
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024.SEP.11

# 都市エコロジー観測所 にゆうすれたあ

## Bridge Studio 実測

発行者：都市エコロジー観測所  
協力：科学研究費補助金プロジェクト「クリティカル・メイキング」、文部科学省「AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業」、大阪大学 Ethnography Lab  
編集・デザイン：韓智仁  
発行日：2024年9月11日

旧岡本医院Bridge Studioの建物（昭和9年建設）は道路沿いには診療所、奥には住居がある。診療所部分の外観はスクラッチタイル、軒下と1階と2階の中間部にはテラコッタ半円筒型の瓦とコンクリートかき落とし仕上げの軒蛇腹で構成され、住居部分の外観は数寄屋造であり、洋と和が混在しているといえる。

民家の実測は主に建築史の文化財保存や伝統的建造物の調査で行われ、実測スケッチの方法には型があるようだが、そうした型をあまり知らないため、WindowScapeシリーズでやってきた実測の方法や、建築設計業務でおこなってきた改修案件の実測の経験をもとに実測を行なった。具体的には方眼紙に柱（構造材）のプロット、柱間の内内寸法、柱寸法より、平面図の骨格をスケッチした。柱間は芯芯で1820mm（一間）より大きく、おそらく京間のモジュールが用いられていると推測される。昭和初期の段階ではまだ木造が工業化されていなかったためである。柱間装置（襖、障子、戸、土壁、欄間など）の情報、平面図から展開図の柱位置を描き起こし、高さ方向の敷

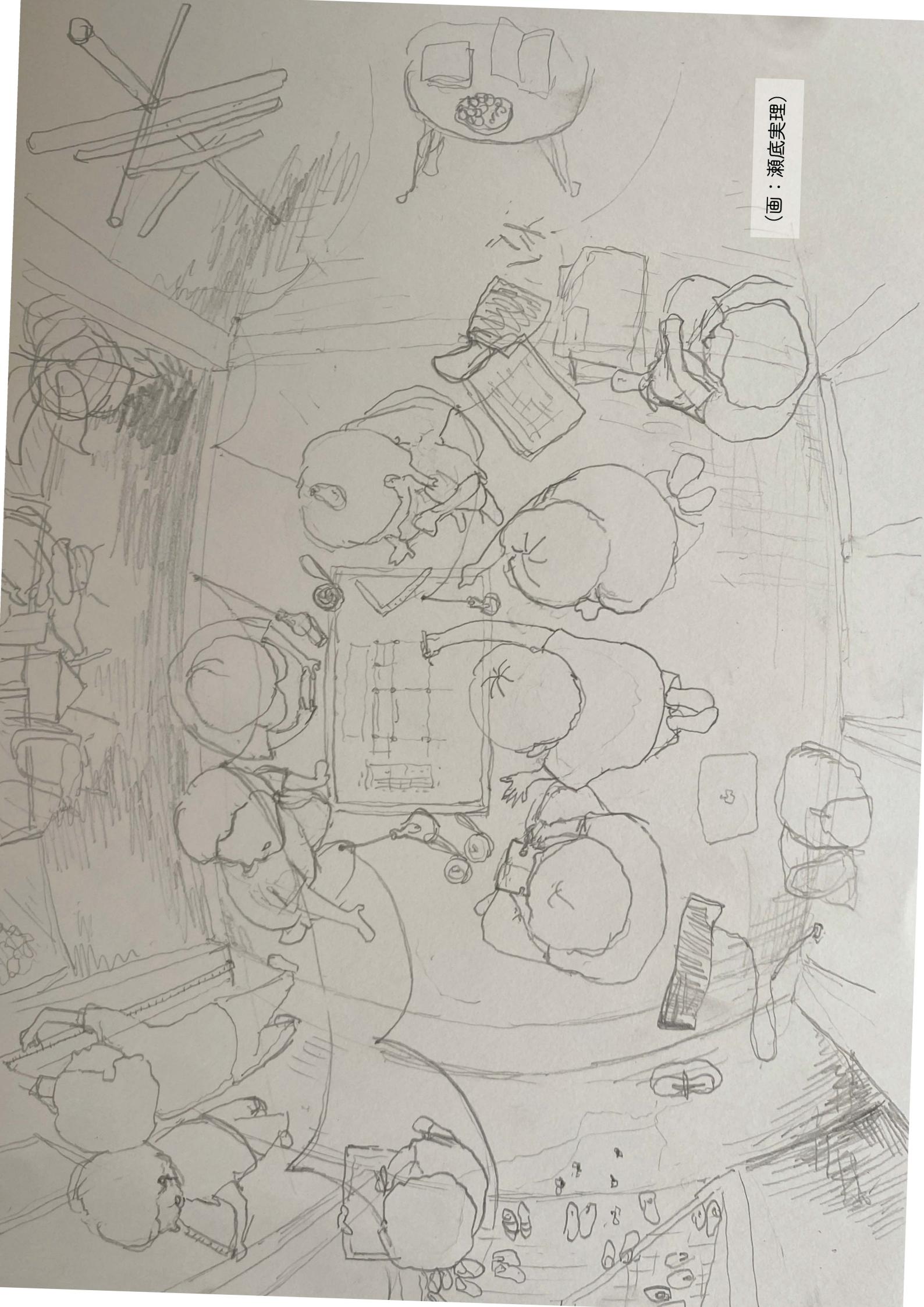
### 都市エコロジー観測所って？

▷都市エコロジー観測所は、市民が主体となり都市環境を観測・可視化するDIY型の観測所です。

▷都市は私たちにとって身近な環境ですが、私たちは都市での暮らしと環境や気候の関係をほとんど知りません。しかし、都市での生活はエネルギー消費、廃棄物などを通して環境に大きな負荷をかけています。また、都市内の植生（緑）や河川は周囲の気温を下げたり、雨水を吸収するなど、アスファルトに覆われた都市の過酷な環境を和らげる働きをしています。

▷都市エコロジー観測所は、Bridge Studio の傍を流れる白川流域のまわりに注目して、都市の中での水の流れ、植生、太陽光、気候の相互関係を可視化することを目指しています。と同時に、都市を都市たらしめている様々なインフラストラクチャー（電力系統、物流システム、上下水道など）の働きとその環境負荷を明らかにもしていきます。

(画：瀬底真理)



居、鴨居、長押、小壁、天井縁などのスケッチおよび寸法を記述していく。床間は複雑であるので、部分的な断面図により奥行方向の寸法を捉えた。また鴨居、長押、欄間などの見附・見込の寸法は部分詳細図に起こした。

2階の和室の天井が外されており、小屋裏が露出されていたため、桁・梁・母屋、垂木で構成された和小屋を実測した。手の届かない範囲であるため、脚立を設置して実測を行なった。小屋裏を横断する梁は丸太材が用いられており、丸太の両端を切り落とした太鼓梁が用いられている樹種は不明だが、曲がり材ではなく直線的な材料であるので針葉樹（おそらく杉か松）が用いられていると推測される。束は正方形断面に製材され、母屋も同じ寸法であるが、勾配なりに天端は削られている。勾配は瓦屋根のため4寸勾配と推測される（これは実測データをもとに後で確認する）。丸太材の長さが十分に取れないためか、丸太がところどころ途切れ途切れであり、丸太同士を継いだり、別の位置で繋がれたりしていることがわかった。（能作文徳）

\* \* \*

二日目の実測WS、朝は9時少し過ぎからスタート。自己紹介と都市エコロジー観測所の説明、本日のプロセスドキュメンテーションのやり方、オープン・エスノグラフィの狙いなどを説明した後で、能作さんから実測のやり方の簡単な説明があり、その後四つのグループに分かれて実測作業を開始。

昨日、一階の実測はほとんど終わったので、今日は主に二階の実測をする。担当は概ね一階の担当を踏まえて決めた。一階と二階は柱の配置などの基本構造は一緒なので、同じメンバーでやった方がいいということになった。

一番難しい小屋組については能作さんが一人で担当することになった。

森田は、杉田さん、田房さんと一緒に和室ふた部屋を担当。一日目は計るのが担当だっ



たが、今日は図面に書きとるのを担当した。昔実測を手伝っていた時も、基本的には計るのが担当だったので、図面を書くのは今回が初めてだった。

初めてのことだったので、最初はかなり戸惑いがあった。まず柱の位置を方眼紙に落としていくことから始めたが、最初の段階で建築実測の慣習的なやり方とは違うやり方でやってしまい、能作さんに指摘を受けた。

まず、建築実測では線はデッサンのように薄い線をいくつも重ねるのではなくて、きちんとした実線一本で書く。次に、柱の位置は柱の中心を基準点とする（自分で書いたやつは柱の外側の二辺を建物の外壁に接するような書き方をしていた。確かに実際の建物は柱の芯にほぼ沿って壁が張られたり、襖が置かれたりするので、柱の中心を基準点にする必要があった。）

指摘を受けて直した上で、最初の図面作りに挑むが、慣れるまではかなり戸惑いがあった。まず、大まかなスケール感すらないので、それぞれの部屋のサイズが方眼紙上どれくらいになるのがいいのかがよく分からぬ。今回は、平面図を書いた周りに展開図を書いていくので、その点も考慮に入れる必要がある。少し考えたが、白紙を前に考えても全く進まないので、能作さんが昨日書いた図面を見て、それを丸ごと真似て配置を決めた。

方眼紙上での部屋の大体の大きさがわかると柱の場所を決めることができるようになつた。現物の柱を一つづつ見ながら、柱の位置を確定し、方眼紙上に適当な形で書いていく。柱の配置が決まるとサイズを計ることができるようになる。この辺りで痛感したが、そもそも図がないとどれを測って欲しいとかいうことができない。頭の中では全ての柱のサイズを測り、柱と柱の間の距離を測ればいいということはわかるのだが、図がないとどこから始めて、次にどこに行ってという手順が全く分からないので、全く作業を開始しようという頭にならない。図を書くことの重要性を実感した。この感覚はその後の作業でも何度も繰り返されることになった。

一旦図を書いてしまうと、今度はそれぞれの柱のサイズを指定して、田房さんと杉田さんに測ってもらう作業に入れるようになった。ただし、最初は方眼紙上の柱と実際の柱の対応関係がなかなか分からぬ。建築の図面を（例えば、柱などの特徴に沿って）現実空間と対照させるやり方が全く分からない。どうやったら対応関係を作れるのか全く分からないので、図面上に南北を示す地図号を書き入れることにした。建物のオリエンテーション上、縁側（2階なので大きな窓が並ぶと廊下）が南側になっているので方向感覚は非常に掴みやすい。自分のフィールドワークでも南北を把握した地図作りは昔時々やっていたので、馴染みやすいのも良かった。

北を書き入れると方眼紙上の柱と現実の柱の対応関係が見えてくるようになり、作業はぐっとしやすくなつた。

南北を書き入れた上で、図面と現場の対応関係をチェックしてみると途中で南北を入れ替わって柱の場所が変なところになっている部分があるのが見つかった。その手の場所を修正した上で作業を続けた。一旦方向感覚が掴めるとだんだん作業はルーチンになっていく。杉田さんたちに計る場所の指示を出して、それを書き留める。

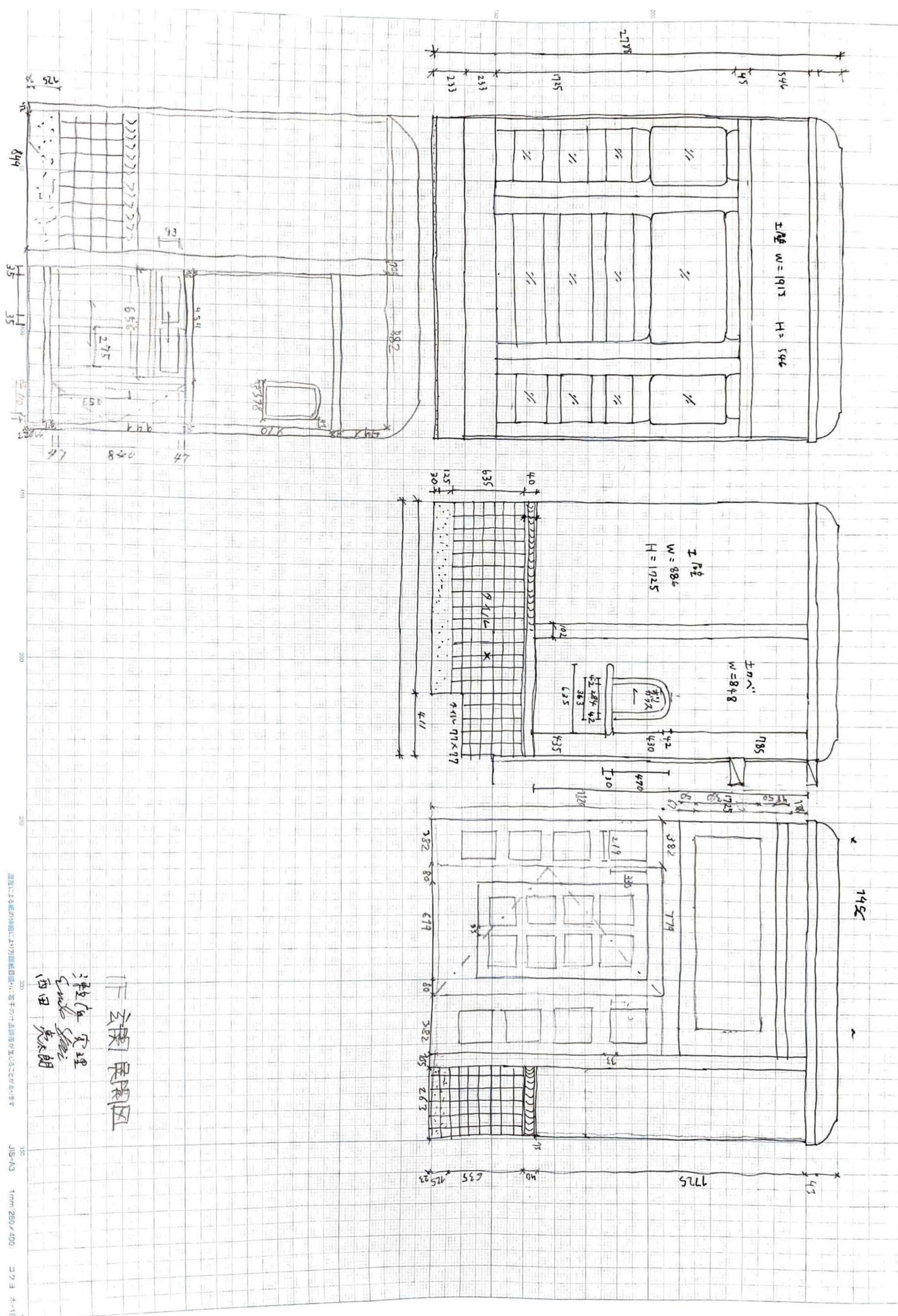
作業がスムースに運ばなくなるのは、測った数字を入れる場所を見つける時ぐらい。数字をどう書き入れたら効果的で曖昧さなく一目瞭然でどこのサイズだかわかるのかが、最初はなかなかピンとこない。数字を書き入れる場所でつまづきつつも、計る場所の指示を出しながらなんとか前に進んで行った。

数字を書き入れる場所で迷ったりするとチームでリズムよく進めないので、若干プレッシャーを感じるところではあった。

一通り平面図を書き終えると、次は展開図。展開図は平面図よりもかなり複雑な上、これこそ最初にスケッチをしないとどこを測ったらいいかさえ分からない。最初にかなり時間をかけてスケッチをしなければいけないので、チームでリズムよく進めているのは完全に諦めて、一旦、杉田さんと田房に休憩をとってもらい、その間に展開図の図面をじっくり時間をかけて書くことにする。

展開図は、文字通りほぼ絵なので、柱の場所を決めればいいだけの平面図よりも戸惑いは大きい。最初はなかなか手が進まないが、「この幅を計る」という具体的な目標に集中するようにすると段々描けるようになってくる。また、数値を入れるための図面なので形や割合があんまりきちんとしていないても大丈夫だということにも気づいていく。

何のために図面を書くのか、そのためには見ればいいのかがわかるようになると、だんだん図面が描けるようになってくる。描けるようになるとだんだん見方も変わってくる。最初に展開図を書くために壁を見た時は複雑さにどうしたらいいかと途方に暮れる気分だったが、計るための目の付け所がわかってくると複雑な床間のような場所を見てもだんだん途方に暮れた感がなくなってきた。図面に書くことを念頭に、見たものが構造化されているような感覚を持つようになった。（森田敦郎）



澤生  
安理  
End  
Levi  
西田  
亮朗

丁巳云漢集

2024年の9月11日、for Citiesさんが浄土寺で運営しているBridge Studio（旧岡本医院）の実測を行った。大阪大学の森田先生、東工大の能作先生、杉田マリコさん、そして学生らが参加した。全部で13人ほどいたと思う。朝の9時、1階の和室に集まった我々は、まず森田先生からこの回についての簡単なレクチャーを受けた。この建築物を起点として、建築から都市、地球まで、スケールを横断しながら、エネルギーや植生など、我々の生活を支えるインフラストラクチャーに目を向けようという試みだ。実際に自分たちが実測をするデータだけでなく、その行為までも主観的、客観的に記録し、人類学的に分析することで、都市や建築、環境を横断した新たな知を得ることを目的としている。ざっくりとではあるが、こういったボトムからの行為やデータの積み上げによって生まれる新たな発見や知識の創出に興味があった自分は、これから待っている新たな経験に期待をしながら、早速2階の洋室の実測を始めた。しかし今振り返ってみると、最初のそういった意気込みは、開始早々にどこかにいってしまったと思う。何しろ暑かったのだ。窓をすべて開けても汗が止まらない。暑さ、一緒に実測をする方々との初対面独特の緊張感、そして慣れない実測作業。いつのまにか目の前の作業にのめり込んでいて、自分の行為を俯瞰的に見直して何か気づきを得ようなどという気持ちは忘れていた。計測するなかで最も印象的だったのは、各ディテールの寸法の定ならしさだ。同じ柱、同じ窓、同じ柱を測っていても、一ミリ単位での計測ではかなりの差が出ていた。そういうことを繰り返していく内に、だんだんとこのズレを生み出していった存在たちに興味が湧いていった。窓枠の大きさを縮めた風雨であったり、それを施工した大工さんなどだ。この視点は、日頃建築を観察するときのもとは全く違う。その建物を設計した建築家が何を考えていたのかばかり考えている。建築は建築家が作るわけではなく、自分の目に届かない存在たちとの連なりのなかで存在しているのだと思った。

言葉で書くと平易で、いろんなところで聞く話ではあるが、灼熱のなか、もくもくと計測を進める中で改めて、身体を通して感じることができた。（鈴木）

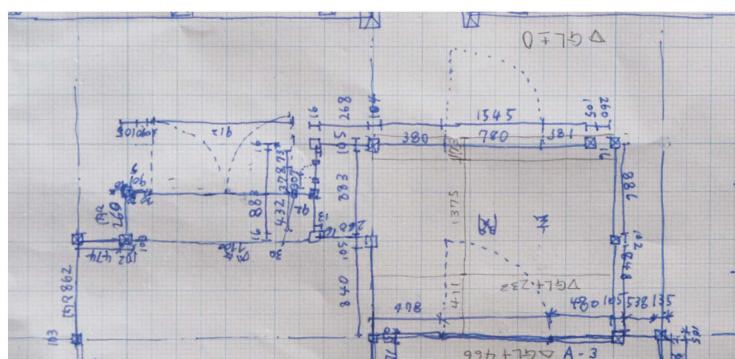
\* \* \*

1日目に比べて2日目はとてもスムーズに実測が進んだ。図面のレイアウトを先に考えながら描き始めることや、必要ないところの省略の仕方などがわかってきて、スピードも早く成果物の仕上がりも良くなった。でも1日目に比べて少し作業感が出てきてしまった。慣れると作業が早くなるけどその分発見がなくて飽きてくる。どっちがいいのかはわからない。

描くこと自体の意味を再確認した。最初に進め方のイメージを話しあって、よし始めよう！となって線を描こうとした瞬間に、あれどどこから描き始めればいいんだろう？縮尺は？ここはどうなってる？とかどんどん疑問が生まれてきて、描くことは具体的にそのことについて考える事と直結していることを実感した。

実測が始まる前はどういう手順で進めるか、作業分担がうまく行くか、実測が終わるかどうかが心配で緊張していたけど、最初のレクチャーを聞き、全員で測ってみるという過程そのものに目的があるということがわかり一安心。そこからは楽しんで実測を進められた。

ちゃんと準備しないと、勉強してから望まないとと思うとやり始めるのが億劫になるけど、とりあえずわかんないけどみんなでやってみようというスタンスだともっと身軽に動き出せる気がする。（井上蒼葉）



ドアはまた閉まっていて神崎さんとかいさんを外で待たせてしまいました。9時ちょっと前に入る。

森田先生の趣旨の話。都市もエコロジー、太陽光、水文現象、プラスインフラ、ものすごいスピードでエネルギーを動かしている

文化人類学の方法で家の造り、自然と構造物の接触を研究するのが難しくて（人と話さないと）、ですが他の実践によって可視化できる

図面->エネルギー・マッピングなど

造りから社会とエコロジーについてフィールドノートを。

図書館、都市エコロジー-->科学をオープンにする。エスノグラフィーはプライバシーなどの懸念はあったりしますが、オープンイベントならその懸念はありません。そしてデータづくりにも参加していただく

能作さん。柱3寸5部?~105ミリメートル  
柳田国男-->今和白?建築の歴史家、民家の研究 プロットすることで理解が深まる

潮底さんが玄関の実測はまだ終わっていないところがあると。まだだったか!

西田さんと組んでまずそれを終わらせます。私は描く。立面図はよりはっきり見えて、平面図よりやりやすい（それでも細かいところは相変わらず難しい）。残っていたのは玄関東側の壁の詳細と北側の壁です。東側の図を一部修正（タイルとして描いたところは実は砂利みたいな石材でした）。

ドアの窓と北側の壁の窓は一番苦労しました。北側の壁の窓は凹んでいる壁にあって、立面図で一部見れないところがありました

（前の柱が視線をブロックしています）。とりあえず描いて後で直すことにしておいた。

私は刺されていないが蚊が多かったみたいです。相変わらず蚊に嫌われています。そして玄関は相変わらず暑すぎます。蚊取り線香を使って改善しました。

30~40分でその実測終わらせて、10分で主に西田さんが修正してもらいます。

そして二階のゲストさんの部屋の実測を。造りは簡単ですぐ完成できるかと。今回は西田さんが描いて、私は実測します。

西田さんは綺麗に描いている上、平面図と立面図をほぼ同時に描きます。ゲスト用の部屋の実測は効率的にできて、40分ぐらいでは何事もなく終わります。ベッドがあって一ヵ所だけ測るのが若干難しかった。そして、昨日みたいにドアとフレームのギャップを測る等、すごく細かいことは実測していません。指金は二階で使うことはなかったです。レーザーは部屋の高さを実測するために今回も一回使いましたし、部屋の平面図の実測の確認にも使いました。

一階に戻って少しゲストさんと話し合って、ランチを買ってくる。ピッタリ距離（レーザーで測る道具の可愛い呼び方）

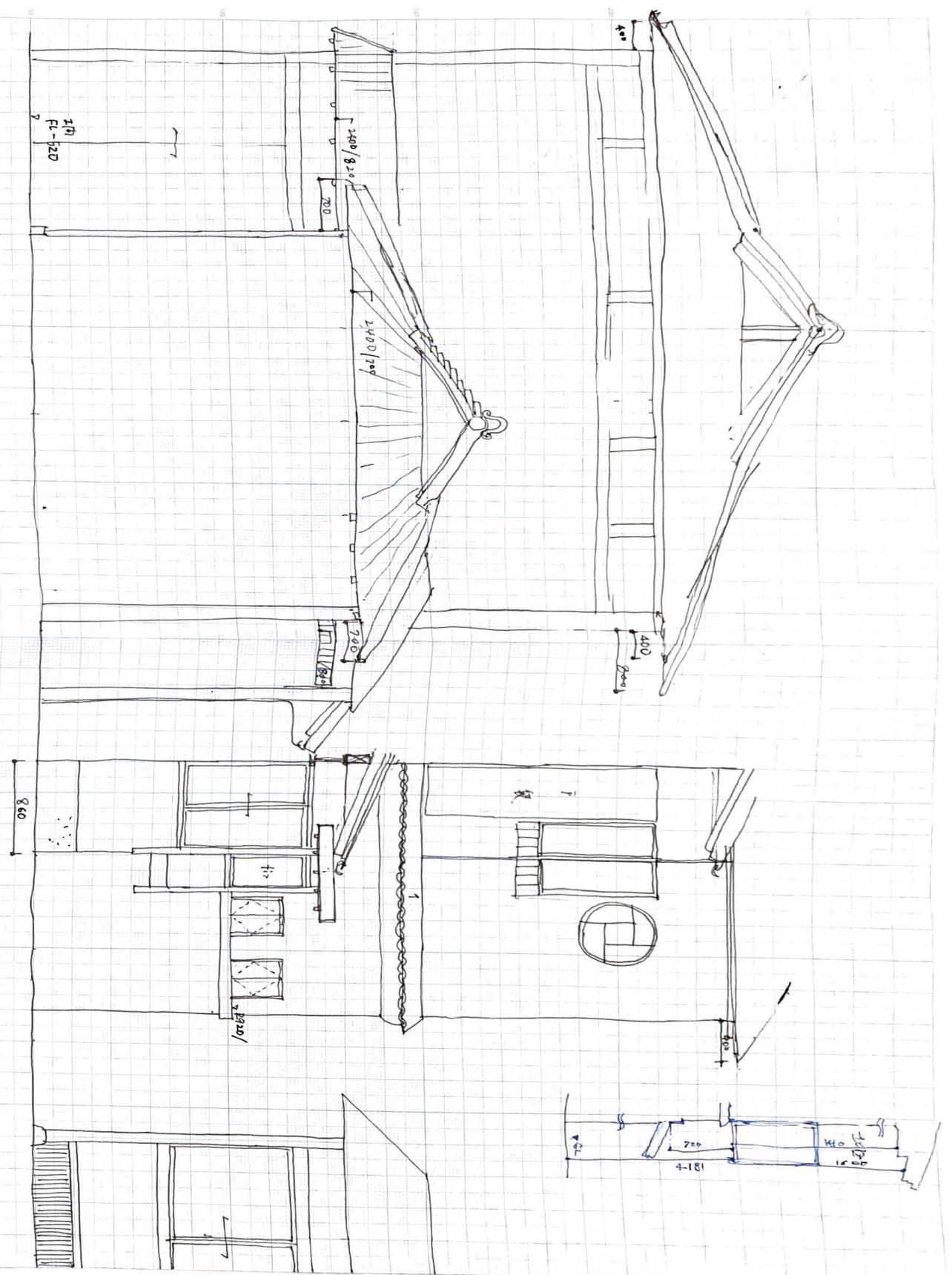
13時26分でまだやっていない部分、3Dの課題、屋根について話し合う。

また玄関の北側の細かいところ10分をかけて少しだけ足して戻る（今回は本当に最後の最後）。

今回、二階の部屋の実測が簡単だったためか分かりませんが、家具などあるのに「デザインしたまま」の部屋がより明確に見えるようになりました。部屋自体は人間向けのデザインをしているのに造る人は少し非人間的な観点、俯瞰的な、客観的なviewpointも使用しないと人間の近代的なスペースとして成り立ちにくい。ヨーロッパの大聖堂は設計図があってもそれに頼らずに造ったところが多くらしくて、100年に渡って職人の知識と勘で造ったと考えたら、近代とは全く違うセンスで建築していたと感じます。

そして、昨日原山さんが玄関の開けられるドアや窓を描いていた時も思っていましたが、ドアは広く開けられる上に、ドアの両方にあるサイドウインドウみたいな部分も開けられて、二階は窓が多くて、こんなに風通しを拘るのは対パンデミック/対感染症的な造りか、ただただその時代は扇風機がなくて風通しを気にしなければならなかっただけ?インフルエンザがやってきたのは家が建てられた年の16~14年前なのでそんな感染症に対する特別な配慮はあったのかな

(サンピエール エミール)



解説  
3章

私にとって今日この場所は、初めて顔合わせする人が多く、慣れない環境でもあったので、少し不安な気持ちを抱えて自転車を走らせてきた。

悪い印象を与えないように早めに着こうと身支度を進めてきたが、結局9時を少し過ぎて着いてしまった。

今日のWS(?)は、浄土寺付近に位置する昭和9年竣工の病院兼住居の実測調査という建て付けだった。

私は学部のときに日本建築史を専攻していたので、その頃を思い出しながら上手くいくだろうと思っていたが、鉛筆と野帳、メジャーを握ってすぐ、学んだはずの作法は身体からすっかり抜け落ちていることに気がついた。昨日進めていた作業の延長を行うということで、図面には既にびっしりと線や数字が記入されていた。受け取った図面が誰に書かれたのかは分からぬが、丁寧な図面だったため、眺めている内に忘れていた作法を徐々に思い出すことができ、少しほっとした。

私は阪大の博士課程に所属しているエミールさんとバディを組み、玄関を担当した。

クーラーと扇風機のかかったリビングと異なり、いずれの設備もない玄関は残暑でかなり蒸し暑く、Tシャツが身体にぴったりとくっついてきて、何とも言えない不快感があった。

おまけに、この敷地が豊かな自然に囲まれているからか、蚊が頻繁に現れては僕やエミールさんの身体を攻撃してくる。

作業開始早々、エミールさんと虫除けの何かを探そうと話した。

リビングから蚊取り線香を持ってきて、キッチンに置いていたマッチを使って火をつけると、私の好きな蚊取り線香の匂いが玄関に充満していった。

少しすると、心なしか蚊が寄り付かなくなっており、心の平穏が保たれていった。

この場所に来たときには無邪気に「綺麗だな」としか思っていなかった豊かな自然と付き合っていくことの難しさを体感した。

また、このちょっとしたハプニングで、少しだけエミールさんとの心理的な距離が近づいたようにも感じ、嬉しかった。

(西田)

\*\*\*

今日は建物西側立面図および風呂部分の平面図、展開図のための実測、記録を行った。まず方眼紙に目測とかんたんな測定により図面のスケッチを描き、そこに実測値を書き込むという順で作業を進めた。昨日は診療室の実測をしたのでその図面を参考にしつつ進めた。

建物は京都の町屋のような洗練された建築の形式に落ち着いておらず、コラージュ的、不均質な印象を受けた。このことは意図、工夫してそうなっている部分もあれば、しかたなくそうなっている部分もあると思った。

西側のボリュームと東側のボリュームで洋風、和風と切り替わっていた。東側（入り口側）立面に瓦は（緑の陶、煉瓦、グレー）3種類あった。また四角い窓と頂部がアーチになった窓があった。また風呂の天井はヴォルト状になっていた。診療室の平面は矩形に2つの出っぱりがついていた。

寸法はスパンとしても部材としてもモジュールが整っていなかった。敷地が整形ではなく、それに合わせるように、建物外形もがたがたしていた。（伊東了宇）



9時にバスで銀閣寺方面に向かい、目的地に着く。写真で見た通りのかわいい建物だった。

玄関に入ってすぐのタイルが目に入る。水色や赤で構成されたかわいいポップな配色だった気がする。

集まって話を聞き、作業を始める。僕は昨日から引き続きだった神崎さんとペアを組んで、2階廊下付近の担当になった。

何から始めれば良いのか、どれくらいの細かさで、何を書けばいいのかが最初わからなかった。

神崎さんから「とりあえず平面図を書こう」、柱の位置を適当にざっと描いて、そこに数字を記号として書き込んでいく。

最初は神崎さんが図を描く担当で、僕が計測をする担当になった。最初神崎さんが配られた方眼紙の罫線に合わせて直線を描き、だいたいの形を把握していく。神崎さんの指示を受けて測っていく。どこを測るのかはどちらかが決めれば、コミュニケーションロスが少なくて済むと思ったからだ（しかし後で気づくが、指示をしながら図を描くのは至難の業だったので、自分が決めた方が良かったのかも.....）

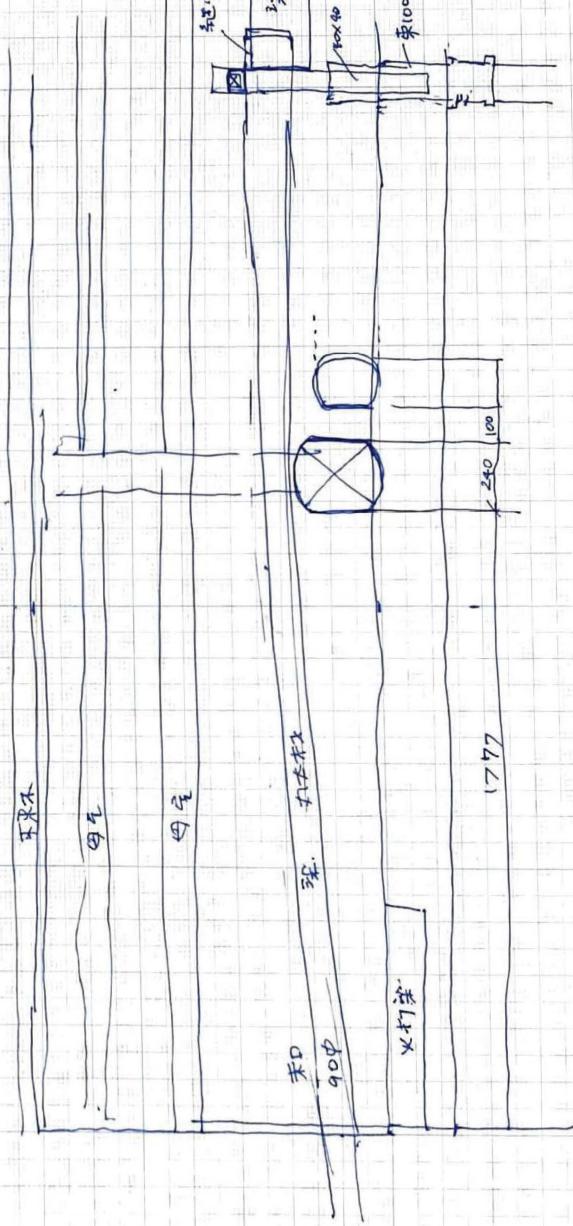
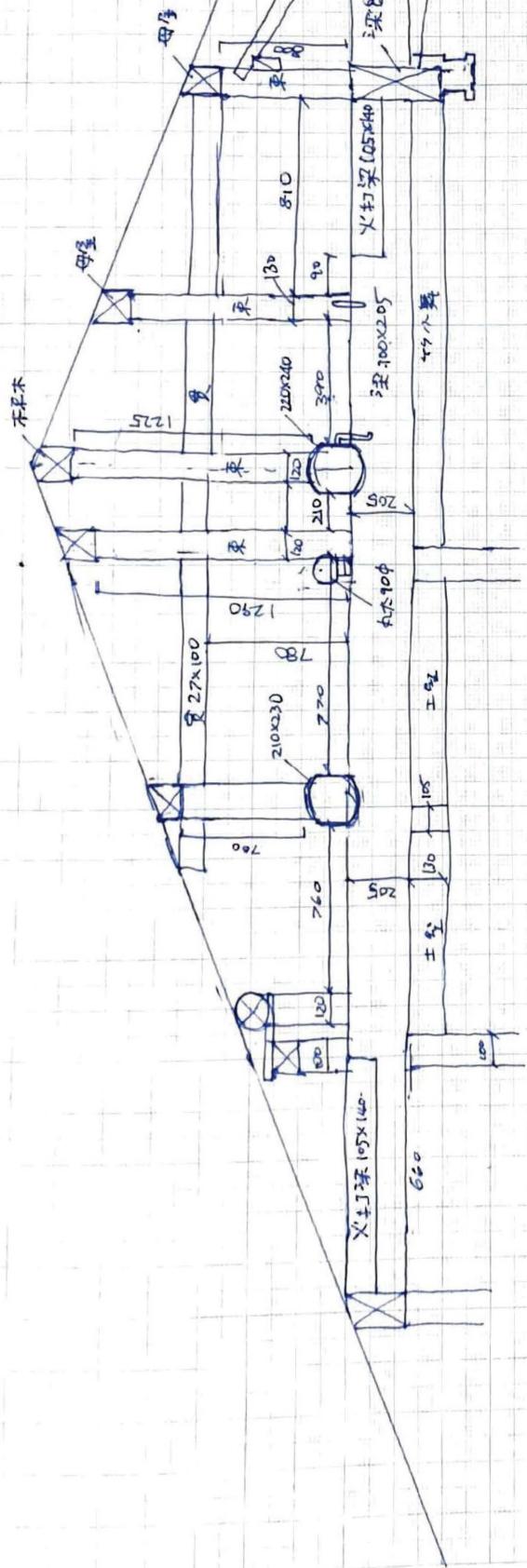
「うちうちを測る」という、ビジネスのおっさんがよく使う「いまいま」を彷彿とさせる言語を使ってコミュニケーションをとる。メジャーを当てて測り、数字を言う。しかしうまく固定しきれない長くメジャーを伸ばす時は神崎さんに手伝ってもらう。数字はミリ単位で言う。自分は高校時代に文化祭のためによくベニヤ板とか小割とか垂木を組み合わせてパネルとか色々を作っていたので、ミリの単位には慣れていたし、よく考えたら設計図を書くのをそこでやっていたので、今回のも完全0から初体験の作業ではなかったかもしれない。しかし、例えば2m8cmのようなものを「280」mmと書き込んでしまうことがあって、危なかった。他に無意識にやっていなければ良いのだが.....

窓の立面図は本当に大変だった。柱や枠、鴨居、など色々（名前を聞いた気がするけど忘れてしましました、、）が絡み合い、2人の共同作業で、1人が測定、1人が記入だと、測定者が測った場所がどこからどこで、記入者はどこに記入すれば良いのかをコミュニケーションするのが難しかった。しかもそこでは「うちうち」という言葉が使えない。



2P05 和室小屋裏  
2024.7.11

θセ174 文行座



「窓枠にとってはうちうちだが、窓にとってはそとそと」みたいな測り方があるのだ。しかもそのためには「窓枠」とか「窓」とか名称の共通認識がなければいけない。ガラスだけを窓だと思っている人、ガラスだけでなく窓枠まで窓だと思っている人、それぞれで意思疎通の齟齬が生じる。なので相手の測っているのを見て、相手が何を窓だとして、何にとって「うちうち」だと言っているのかを判断しなければいけないので。

窓をどこまで描き込めば良いのかも判断が難しかった。窓は、垂木みたいなある程度太い窓枠と、ガラスの縁を木で囲ったそのさらに内側の窓枠があって二重になっていた。これを両方描くべきなのか、どこまでを測れば良いのか。

あとで韓さんに言われて気づいたが、これは窓ガラス部分だけの長さを把握すれば良かったのだ。この二重の窓枠に関しては無視して良かった。なぜなら窓ガラスと木枠の熱伝導の違いだけが重要だからである。また二重の窓枠を気にするとしたら、窓枠の断面図を書かなければいけなくなる。そんな余裕はないので、やはり二重の窓枠は無視するべきなのだ。

描いてみてわかったが、枠が増えて線がふえると、窓なのか壁なのか木なのか、どこが空いているのかがわかりづらくなる。これはどうやって解決すべきなのか？他のグループで細い両側に向いた矢印みたいな図形を使って引き戸を表現しているっぽいところがあったが、自分は正確にこの記号の意味を理解できていないので、使うのは見送った。代わりに土壁は点々で表現して素材感を出してみた。

だんだんと学習したのは、どの部分を最初に描けばうまく立面図がかけるかということだ。最初は柱、そのつぎに貫通する枠を描いて平面を区分けをして、中を窓や壁、細い枠で埋めていく。これは何か家の構造を理解するようになっている感じがして面白かった。スケッチの中で家を骨組みから建てて、その間に建具を設置していくような感じで。

最後の方は慣れて、どれくらい図式化して描けば良いのかがわかるようになってきた気がする。素材の違いを表現するという一つの基準が確立されると、スイスイ進んで気持ちが良い。黙々とやれるので気持ちがいい。

最初のスケッチも迷いがなくなるので、スイスイ線が綺麗に描けて、それが綺麗に描けると、その後もうまくいくようになる。うまくいくようになると、全体が見えてきて、数字を描く隙間をどこにしようとかそういうことも考えられるようになる。（諸井裕太）

＊＊＊

2日間、15名ほどでひたすらBridge Studioを測る。スケッチを書いたのち、定規とメジャーでミリ単位で柱などのサイズを測り、方眼紙に鉛筆で書き込む。2~3名でチームを作り、部屋毎に担当を割り振って、あとはひたすら黙々と図る。その過程で、ここが歪んでいるとは、ここのが良いとか、この壁紙がかわいいとか、そんな他愛もない細部への感想をぶつぶつと呟きながら、黙々と作業する。以下、やっていて思ったこと、忘れたくないこと。

・ここ迄やる？と感じるほど細かい作業。一方で、1ミリ以下の違いは無視したり、なんなく計算で書き込んだり、意外と曖昧な世界もある。このバランスが絶妙で面白い。

・木の伸縮や沈み・垂れなどを考えると新築時代と比べてもサイズは違うんだろうなと思う。普遍性はない。それが木造の面白さであり、難しさなのかも？

・書き込みの仕方、線の書き方、スケッチのシルエットには、今和次郎の考現学のスケッチみたいに、その人らしさが出る。上手い下手の他に、味があるやつ、自信がなさそうなやつ、曖昧性と余白を残したやつなど、さまざま。客観的な記述とは？

・作業の合間の、森田さんと能作さんとの会話。近年の建築史やアーバンスタディーズ、文化人類学の交差点について。メンションされたのは、Anders Blokの「Urban Cosmopolitics」、Simon Marvin 「Splintering Urbanism」、Albena Yaneva 「Five Ways to Make Architecture Political」、近藤和敬『21世紀の自然哲学へ』、布野修司『近代世界システムと植民都市』、青井哲人

（杉田真理子）